

シアター公演報告 —2019 年度の記録—

八木 透

宗教文化ミュージアムでは、2019 年度には以下の通り、計 3 回のシアター公演、および 1 回の映像の上映会を開催した。

第 40 回シアター公演「民俗芸能を担う若者たち—嵯峨大念仏狂言の若手育成—」

日 時：2019 年 6 月 2 日（日）14 時～17 時

出 演：嵯峨大念仏狂言保存会（国指定重要無形民俗文化財）

解 説：八木 透（本学歴史学部教授・宗教文化ミュージアム研究協力者）

芳野 明（嵯峨美術大学芸術学部教授・嵯峨大念仏狂言保存会）

来館者：126 名

嵯峨大念仏狂言は、戦後の厳しい社会変動の中、昭和 38 年（1963）には後継者不足が原因で中断を余儀なくされた。その後、昭和 50 年（1975）には狂言関係者の古老や多くの地元住民たちの力で、嵯峨大念仏狂言保存会が結成され、伝統ある狂言が復活した。中断を経験した危機意識もあって、次世代の担い手の育成を目的として、昭和 64 年（1989）には地元の嵯峨・広沢・嵐山小学校に通う子どもたちを対象として、「嵯峨狂言クラブ」が結成された。現在では保存会メンバーが狂言の指導にあたっている。狂言クラブは子ども狂言から大人狂言へという後継者作りの場として、活発な活動を続けている。

本公演では、八木、芳野両教授による解説の後、嵯峨狂言クラブの子どもたちによる



写真1 子ども狂言「橋弁慶」



写真2 子ども狂言

「橋弁慶」の公演、および嵯峨大念佛狂言保存会による「釈迦如来」の二公演が行われた。特に狂言クラブの子どもたちによる白熱した演技に、会場は大いに盛り上がった。

第41回シアター公演「音楽のクロスロードーアンデス音楽とカホン」

日時：2019年10月20日(日)14時～17時

出演：中山拓人氏(カホン奏者)、イワシ、松田悠義(バンド演奏)

解説：中山拓人氏

齊藤利彦(本学歴史学部教授・宗教文化ミュージアム兼任学芸員)

来館者：133名

本ミュージアムでは、かつてより、アジア地域の宗教と関係のある音楽を中心とした公演である「日本の音楽・アジアの音楽」というシリーズが開催されており、これまで数多くの演奏家を迎えての上演を行ってきた。その発展形として、今回から「音楽のクロスロード」と名づけられたシリーズが立ちあげられることとなった。その第1回目の公演として、南アメリカ大陸のアンデス地方を代表する打楽器の「カホン」の演奏会が企画された。

公演では、カホン奏者の中山拓人氏を招き、カホンという楽器の解説、および実際の演奏をしていただいた。また、齊藤教授を司会役として、中山氏と本ミュージアム館長の小野田俊蔵氏との対談も行われた。



写真3 カホン演奏



写真4 カホンについての対談

シアター上映会「大善寺玉垂宮 鬼夜一討伐され祀られる鬼たち」

日 時：2019 年 12 月 7 日（土）14 時～16 時 30 分
上 映：九州国立博物館アーカイブス「大善寺玉垂宮の鬼夜」
（福岡県立アジア文化交流センター提供、2007 年制作）
解 説：八木 透（本学歴史学部教授・宗教文化ミュージアム研究協力者）
来館者：92 名

福岡県久留米市大善寺町に鎮座する玉垂宮は今からおよそ 1900 年前の創建と伝えられる古社で、広域から篤い信仰を集めてきた。明治初年の廃仏毀釈によって神宮寺であった大善寺は廃され、玉垂宮のみが残って現在に至っている。

毎年正月 7 日に行われる「鬼夜」は、数百人の裸の男たちと日本一といわれる六本の大松明による勇壮な火まつりで、大晦日の夜から正月 7 日までの「鬼会」と称される行事の最後に行われる。鬼会では、大晦日の夜に燧石で起した御神火（これを鬼火という）を神殿に灯し、神職が 7 日 7 夜守り続けて、天下泰平・国家安穩・五穀豊饒・家内安全を祈願する。その満願の日が正月 7 日の鬼夜である。鬼夜は古来の大秘事とされ、かつては神職をはじめすべての村人たちは、まつりで何が行われるかを口外することが厳しく禁じられていたといわれている。このように、鬼夜はきわめて秘儀的な性格が強い行事であったことがわかる。なお鬼夜は、日本三大火祭のひとつに数えられ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

第 42 回シアター公演「淡路人形浄瑠璃の世界」

日 時：2020 年 1 月 26 日（日）14 時～17 時
出 演：淡路人形座（国指定重要無形民俗文化財）
趣旨説明：八木 透（本学歴史学部教授・宗教文化ミュージアム研究協力者）
解 説：斉藤利彦（本学歴史学部教授・宗教文化ミュージアム兼任学芸員）
来館者：157 名

淡路人形浄瑠璃の歴史は、古く 16 世紀の室町時代後期にまでさかのぼる。当時西宮神社にいた百太夫という名の傀儡師くぐつしが淡路島の三條村へやってきて、人形練りの方法を伝えたのが始まりと伝えられて、江戸時代には徳島藩主の蜂須賀氏の保護もあって急速に発展した民俗芸能である。

義太夫節にあわせて 3 人が一体の人形を練るという点では、淡路人形浄瑠璃は大阪の文

楽と同じだが、人形の頭がかなり大きいのが淡路の特色である。明治中期以降に各座が競い合って人形を大型化したもので、大きな人形がダイナミックに、一方できわめて繊細に動く演技が淡路人形浄瑠璃の醍醐味だといえよう。

公演では、八木、斉藤両教授による解説の後、「生写朝顔日記・大井川の段」の上演に引き続き、ワークショップとして太夫・三味線・人形の解説を、後半には「戎舞」の上演が行われた。まさに生きているかのように操られる人形の不思議な動きに、すべての来館者が魅了されていた。



写真5 淡路人形浄瑠璃ワークショップ



写真6 「戎舞」の実演